

# 愛知県における昭和 約 愛知県陶磁資料館

## 研究紀要

一方、近年、各地の研究会が開催され、地域ごとの時代の土器や小切手などの出土品が研究されるようになつた。後醍醐天皇への贈り物なども見られておりました。

## 2

会場では、昭和56年10月10日から11月2日までの特設展示「後醍醐・後白河・後宇摩野の小切手」に対しまして、貴重な調査成形化がなされ、各地で出土した切手の出土品を一堂に集め、展示されました。一般の方々に興味を抱いて貰うための講演会などを実施しました。

### シンポジウム『平安時代の土器・陶器

会場にて開催されたシンポジウムには、約20名の研究者が登壇し、各論議を行いました。

#### -各地域の諸様相と今後の課題-』の記録

シンポジウムには、主な発表者、約20名の出席者のほか、全国各地の研究者200余名が参加いたしました。例会会場に多くおられた。昭和56年11月14・15日同会場にて行なった「後醍醐天皇と小切手」の研究会では、各地の研究者から、この問題を熱心に追求してほしいとの意見も述べられました。

そして、平安時代の全國各地の小切手の同源性を明らかにして、考古学的問題を手解き取りにするなど、大きな成果を上げることができました。

また、各地の研究者から、この問題を熱心に追求してほしいとの意見も述べられました。その結果、多くの会員を熱心に、当研究会が開催されて初めていたいとも言えます。

本紀要が平安研究会の研究会として活用されることを願うと共に、シンポジウムにおいて多くの方をおられた研究者、研究者その他の方々に深く感謝の意を表する次第であります。

昭和56年11月14日

愛知県陶磁資料館

## 序

愛知県における昭和 30 年代の猿投窯の発掘調査結果は、それまで日本の陶磁史上、空白期といわれた奈良・平安時代の陶磁器を明らかにする画期的なものでありました。そして、その後うちたてられた猿投窯製品の年代観は、この時期の日本各地の陶磁器年代の比定の指標となって、全国に大きな影響力を持つに至りました。

一方、近年、各地の発掘調査が進展し、地域ごとにこの時代の土器・陶器の詳細な時期区分が行われるようになり、猿投窯編年観への様々な問題も提起されてまいりました。

当館では、昭和 56 年 10 月 10 日から 11 月 29 日にかけての特別展「猿投窯—須恵器・瓷器から中世陶へー」におきまして、近年の調査成果に基づき、各地で出土した猿投窯製品の優品を一堂に集め、展示しましたところ、一般の方々に関心と理解を高める多大な成果を納めましたが、同時に、先の問題にからみ、猿投窯編年の再検討を含めた各地の平安時代の土器・陶器の編年を主題に「平安時代の土器・陶器—各地域の諸様相と今後の課題ー」と題して、シンポジウムを開催いたしました。

シンポジウムには、9 名の発表者、3 名の助言者のほか、全国各地の研究者 200 余名の参加があり、狭い会場にもかかわらず、昭和 56 年 11 月 14・15 日の両日にわたり、熱心な発表と討議が行われました。そして、平安時代の全国各地の陶磁器の関連性を明らかにし、編年上の問題点を浮き彫りにするなど、大きな成果を上げることができました。

その後、各地の研究者から、この成果を早く公表してほしい旨の意見も強く、ここにシンポジウムの全容を集録し、当館研究紀要 2 として発行することといたしました。

本紀要が平安時代陶磁史研究に広く活用されることを願うと共に、シンポジウムに際して多くの労をとられた助言者、発表者その他の方々に深く感謝の意を表する次第であります。

昭和 58 年 3 月

愛知県陶磁資料館

館長 奥田信之

## 例　　言

○本紀要是、昭和56年11月14・15日に当館主催のもと、当館3階第3展示室に於て開催されたシンポジウム『平安時代の土器・陶器—各地域の諸様相と今後の課題—』の発表・討議および講演の記録である。

○発表・討議および講演等は、次ページの目次の順序に沿って行われた。進行の状況は以下のとおりである。

11月14日(土) 13:00 開会宣言 愛知県陶磁資料館副館長 溝口 豊

主 催 者 挨拶 愛知県陶磁資料館々長 新美富太郎(現・副知事)

来 賓 挨拶 愛知県陶磁資料館建設委員 本多 静雄

13:30 開 催 趣 旨 同 上 楠崎彰一

14:00～17:10 発表および質疑 東北(白鳥良一)～猿投(斎藤孝正)

11月15日(日) 9:30～12:40 発表および質疑 陶邑(中村 浩)～九州(亀井明徳)

13:40～14:10 講 演 東京大学名誉教授 三上次男

14:10～16:30 討議およびまとめ 九州大学教授 横山浩一

16:30 閉 会 (主催者側役職は、昭和56年当時)

○発表者等は、目次のとおりであるが、シンポジウム進行にあたり、助言者を楠崎彰一、三上次男、横山浩一の3氏に依頼し、進行を当館学芸員浅田員由が努めた。

○本紀要の編集には、当館学芸課職員全員があたった。録音から原稿を起こしているが、質問者の声が遠く、一部内容不明のところがあるが、そのままとした。

なお、発表内容については、正確を期するため、発表者にその正誤を依頼し、返答を受けたうえ印刷にした。しかし、読みやすくするため、重複部分などは避けた。従って、文章上の責任はすべて当館にある。

○掲載の方法は、発表順とし、当日配布された『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」発表要旨』の発表者分を前半に再録し、発表内容および質疑を後半に載せた。また、同時に配布された資料は、一部縮小し、発表要旨の後段ないし、発表内容の途中にすべて再録した。

## 目 次

1. シンポジウム開催趣旨	樋崎彰一（名古屋大学教授）	2
2. 東北地方南部の様相	白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所）	8
3. 関東地方の窯址出土須恵器編年と年代	服部敬史（八王子市教育委員会）	19
4. 北陸地方の様相	吉岡康暢（石川県立郷土資料館）	33
5. 東海地方の灰釉陶器	柴垣勇夫（愛知県陶磁資料館）	43
6. 猿投窯編年の再検討について	樋崎彰一・斎藤孝正（名古屋大学）	53
7. 平安時代の土器・陶器—陶邑窯を中心として—	中村 浩（大谷女子大学）	72
8. 平安京の様相	寺島孝一（平安博物館）	86
9. 平城京における平安時代の焼物	巽淳一郎（奈良国立文化財研究所）	96
10. 中国地方に於ける平安時代の土器・陶器の諸様相と今後の課題	伊藤晃（岡山県々史編さん室）	120
11. 九州の平安陶磁	亀井明徳（九州歴史資料館）	128
12. 《講演》		
	「平安前期における中国陶磁と日本陶磁との関係」	
	三上次男（東京大学名誉教授）	138
13. 討議(I)		145
14. 臨時発表「滋賀県鴨遺跡出土陶器」	兼康保明（滋賀県教育委員会）	150
15. 討議(II)		155
16. まとめ	横山浩一（九州大学教授）	160
17. 追補	樋崎彰一（名古屋大学教授）	163
18. 編集後記		163